自分の興味を探る 自己理解に最適なツール

早稲田大学 教育・総合科学学術院　教授　**三村隆男** 氏に聞く

アセスメント・ツールの活用

キャリア教育の中心となる活動は「自己理解」といって過言ではありません。

職業レディネス・テスト（VRT）は、主に自分の興味はどういう傾向にあるかを測定する検査であり、自己理解に大いに役立つツールです。個人の「興味」をみる「興味検査」ですから、「適性検査」のように「能力」を測るものではありません。自己理解を図る方法は数多くありますが、その中でも非常に有効なものの一つだと思います。

VRTなどのアセスメント・ツールで測定できることは、もちろん個人のすべてではありませんが、一つの真実です。例えば、円錐の立体を特定の平面で切ったときに現れる断面は、正円、楕円、放物線、三角形…などいろいろあるように、VRTの判定結果は「興味」という角度で切ったその人の断面図といえます。

VRTは、ホランドの優れた理論である「RIASEC」の枠組みに基づいています。人間のパーソナリティ・タイプは多彩であり、6つしかないわけではありませんが、便宜上、R、I、A、S、E、Cの6つのタイプに分類することで非常に説明しやすくなるのです。そして、検査結果を使ってワークシートを仕上げる過程で、興味、自信、基礎的志向性に基づき自らのキャリア・ビジョンを構築していくことができるツールになっています。

また、このテストで多くの職業名に触れることで、「自分はいかに職業のことを知らないか」がわかるという効用もある。その気づきは、「職業探索」を始めるきっかけとすることができます。

アメリカなどではキャリア教育にアセスメント・ツールを使うのは当たり前のことですが、日本ではそこまで一般化していないのは残念ですね。

その理由の一つは、先生たちの間に「検査不信」があることだと思います。検査の判定結果が配られて終わり、というのでは、自分の検査結果と期待していた自己像とにズレがある場合、生徒は不安感をもったままです。挙句、自分で合理化して「検査は当てにならない」という誤解をもってしまう。

先生たちは過去に自分が生徒としてそういった経験をした記憶があると、検査が信用できないのです。やはり検査の結果に疑問や不安を感じている生徒に対しては、きちんと説明し、カウンセリングして次のステップに導いていくことが大切で、そのための環境づくりも求められますね。

そのようなフォローができるようにするためには、まず先生は自分でテストをやって、自分のプロフィールを読み取ってみることが必要です。自分でやって初めて生徒に実施できる。セミナー等の研修会にも積極的に参加するといい。

よくないと思うのは、学校、先生がキャリア教育のカリキュラムを業者に丸投げすることです。自己理解の大切さを理解し、先生自身がそれを生徒に教えていく環境を整備していくべきです。2時限使ってVRTを実施すれば、生徒一人ひとりが自分の「これから取り組む仕事」を探索する姿勢を作るきっかけとなり得るのですから、ぜひ自分でやってほしい。

例えば、上越市の中学で行われているように、「キャリア・スタート・ウィーク」の職場体験の前にVRTを行う、という形でセットにしてキャリア教育のプログラムを組むことで、一層効果は上がると思います。

早稲田大学では、私が担当する教職課程の科目の一つである「教育基礎総論」（教育学原論）で、VRTを使っています。キャリア教育での自己理解の

みむら・たかお●1953年石川県生まれ。埼玉大学教育学部卒業、東洋大学大学院文学研究科修士課程（教育学）修了。埼玉県立高校教師を24年務め、2000年上越教育大学講師、02年同大助教授を経て、現在早稲田大学教育・総合科学学術院教授、高度教職実践専攻主任。全国のキャリア教育実践地域、実践校への指導・援助を行っている。著書等に『インターンシップが教育を変える』（共訳）、『キャリア教育と道徳教育で学校を変える！』（編著）、『新訂キャリア教育入門』、『小学校キャリア教育実践講座』など多数。

重要性を教えるためにやらせるわけですが、学生自身の気づきも大きいですね。教師としての自己理解という側面もある。自分でいうのもなんですが、人気の高い講義になっています。

検査結果の活かし方を考える

注意すべき点としては、じっくり考える生徒と即断する生徒によって回答に時間差が出てくることです。判断にかける時間は人さまざまで、早い子は15分で済みますが、遅い子だと30分くらいかかる。遅い子が焦ってやってしまうと意味がなくなってしまうので、落ち着いた環境でできるようにするためには、例えば、休み時間の15分前くらいにやって、終わった子は出て行ってよいし、まだの子はゆっくりマイペースでやらせるという方法もあります。

それと、やはり結果をどう読み取ればよいか、ですね。

興味と自信の高さが違っていた場合は、その意味を考えないといけません。自信は経験値に基づくものです。例えば、E領域の興味は高いが自信が低いという場合、本人は集団でのとりまとめがうまかったり、積極的に行動するタイプではあるけれど、生徒会に参加し役員をしていたりすると、生徒会のメンバーはEのレベルが高い人が多いので自信が低くなってしまった、という例もあるわけです。

また、A領域への興味が高いのに自信が低い場合、美術の好きな生徒が自分の絵画作品を酷評されたことがあった時など、その経験の記憶が影響して自信が低く出ることもあり得ます。

基本的には「興味」で判断するとよいでしょう。「自信」は経験を積むことで、今後高めることもできますから。

本人の希望と検査結果が乖離している場合も、「あきらめなさい」と否定してはいけない。検査結果は、「あなたが希望する職業に就いている多くの人の興味はこのあたりにある」ということであって、「あなたの興味領域もその職業に活かせることがある」ことを教えるのです。また、職業理解が片寄っている可能性もあるので、「理解の仕方が一面的かもしれないから、もう一度その職業を調べてみよう。一つの仕事には多様な要素がある。知識が少なかったことによる誤解やギャップだったことがわかるかもしれないよ」とアドバイスします。

学校全体での導入でキャリア教育の体系を構築

ワークシートのプロフィールを作る過程で友達と見せ合いながら、自然と話をすることも意味があります。適性検査と違って「興味検査」なので、数値が低くても劣等感をもたないですみます。自分のプロフィールを見せ、人のものを見ることで自己理解が深まりますから、グループ・ワークのツールとして使えます。生徒は一人で自分の結果を見ていると不安なので、不安を解消しようとして人に話す、それはピア・カウンセリングの効果があります。

結果を残し、進路ポートフォリオとして1年次、2年次、3年次と記録していき、変化を観察すると、分化度が変化していくことがわかります。自己理解が深化することで、興味が分化していくのです。

キャリア教育用ツールは多数出されていますが、玉石混淆で使い勝手がよくないものも多い。VRTは標準化された信頼性の高い検査ですし、非常に使い勝手がよい。学校全体で導入して進路指導の体系に位置づけて継続すれば、そのデータは積み上げられて、まさに学校の財産になります。学校全体のキャリア教育、進路指導の体系を構築していく時の、組織作りのツールともなる。

キャリアは、語源が「轍」ということからもわかるように、自分の「過去」が根本にある。自分というのは過去から成り立っています。過去が自分の興味や自信を作っているわけです。それを見つめることによってこそ、将来を形作ることができる。VRTはそのための材料を提供してくれる、優れたツールです。

VRTは、日本の子どもたち、若い人たちを変えていく力があるツールだと思います。

VRT● Tips 職業レディネス・テスト
Vocational Readiness Test：VRT

職業レディネス・テスト（VRT）は、①職業に対する興味の傾向（その仕事をやってみたいか）、②職業に対する自信の傾向（その仕事をうまくやる自信があるか）、③日常生活における志向性（日常の生活行動や意識がどのような方向をさしているか）、をA、B、Cの3つの検査で測定することで、進路選択・職業生活への準備状態（職業レディネス）を把握するもの。キャリア教育に不可欠な自己理解と職業理解に効果が期待できる。

アメリカの心理学者J.L.ホランドによって類型化された6つの職業領域（現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的）への興味・自信と3方向の日常行動特性（対情報、対人、対物）から、職業興味と職務遂行に関する自信度、基礎的志向性の特徴がわかる。

・学生・生徒の進路選択への関心・意欲を高めるため
・就職希望者が就職先を絞る手がかりとして
・進学希望者が進学先を検討する手がかりとして
・職業情報学習の材料として
・教師の生徒理解・指導方針作りに役立てるため

と、幅広く利用できる。

1972年に公表されて以来、全国の中学校、高等学校、職業相談機関等で広く活用され、06年には2万8千人分のデータ分析を基に第3版が開発され、新たにワークシートも作成された。

ワークシート「結果の見方・生かし方」では、標準得点を基にプロフィールの作成などを行い、「仕事と職業の六角形」から類似する職業を具体的に調べながら、職業に関する自分のイメージをチェックしたり、社会にどんな職業があるのかを知ることのきっかけとすることができる。